

法金剛院の阿弥陀如来像における定朝様の影響の再評価について

松出 洋子（佛教大学）

法金剛院阿弥陀如来像（以下、本像）は、大治五年（1130）落慶の法金剛院西御堂の本尊で、発願者は待賢門院、制作仏師は院覚である。本像は、定朝作の天喜元年（1053）平等院鳳凰堂阿弥陀如来像（以下、平等院像）より約八十年後の制作にあり、一般的には「定朝様」を墨守した結果、表現が形骸化・硬化したと評価されている。しかし実際に本像を見上げると表情は柔らかく、従来の評価には疑問がある。さらに「定朝様」については平等院像の系統だけでない、二系統が存在したとする注目すべき見解もある。そこで本発表では、本像を対象に「定朝様」について改めて検討したい。

平等院像以外の「定朝様」のもう一つの系統とは、平等院像の翌年に制作した西院邦恒朝臣堂阿弥陀如来像（以下、西院像）である。一般には、これら平等院像と西院像との像容に大きな相違を認めていない。しかし近年、大宮康男氏は両者の違いに着目し西院像の系譜を引く一群の存在を指摘している。すなわち、法界寺、万寿寺、浄瑠璃寺、法金剛院等の一群の阿弥陀像であり、これらが西院像を模範したと論じている。大宮氏の主な根拠は、西院像の採寸値から判明した正面観の相違や、衣文線の形式的処理の相違のほか、『春記』『中右記』『長秋記』に制作から約八十年にわたり断続的に賛辞のことばが遺されていること、中でも『長秋記』には長承三年（1134）に院朝が採寸した数値が記されていることなどである。

また、「定朝様」に二系統があるとは論じないものの、法道寺阿弥陀像に関する山崎隆之氏の研究は、平等院像と西院像との造形的特徴を数値的に比較しており、参照される。そこで、本像を含む西院像系統の一群を対象に、平等院像との面貌表現を数値的に比較した結果、西院像系統の一群は平等院像に比して「細い目」「短い鼻」「短い顎」という特徴を持つことがわかった。このうち西院像の「短い鼻」については、本像と同時期に制作された鳥羽勝光明院の阿弥陀像の制作に関する『長秋記』の記事にも、同様の認識があったことが記される。したがって、本像を含む西院像系統の一群は衣文線だけでなく、顔面についても西院像の系譜に属することは明らかである。

のみならず、造像の経緯からみて、本像は並々ならぬ思い入れを込めた作であった可能性が高い。なぜなら、本像は発願者の待賢門院にとって世俗的な絶頂期から後半生へと転ずる節目に作られたものであり、それだけに重要な意味をもつものであった。さらに院覚にとっても、本像は仏師としての再起をかけて取り組んだ本格的な大作であった。このようにみえてくれば、「定朝様」として継承され模倣されたのは、平等院像ではなくむしろ西院像であった可能性が高い。本像は、堂内で見上げることを意識して作られたものであり、当時としては平等院像以上に評価されていた西院像の系統に属する作であったと考えられる。